

Rintaro Akamatsu Piano Collection Vol.6

こどものための小品集 2021

曲目解説

長井 進之介

[1] French folk song: Shepherd's daughter / フランス民謡:羊飼いの娘

「まきばの秋」としても知られている。羊飼いという職業は最も古い職業の一つで、約 5000 年前のアナトリア半島が発祥。楽曲は素朴な旋律で、のどかな風景が広がる山岳地帯の雰囲気であらわれている。右手が奏でる旋律を左手が半小節遅れて追いかける、カノン風の作品である。

[2] Wolfgang Amadeus Mozart: Allegro B-dur, KV.3 / モーツァルト:アレグロ変ロ長調 KV.3

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトが 1762 年に書いた作品。父レオポルトは娘ナンネル(モーツァルトの姉)のチェンバロの練習用に 40 曲以上の小曲からなる『ナンネルの楽譜帳』を編集した。そしてその余白には、早熟であったヴォルフガングが次々に生み出す楽曲を書き込んでいた。この《アレグロ》もそうして書き取られたうちの 1 曲である。なお、この曲を書く前にはモーツァルトは家族と共に人生で最初の演奏旅行を行っている。幼年期の作品ながらすでにモーツァルトらしい生き生きとした雰囲気が跳躍音型を主体とした主題によって生み出されている。

[3] N. Ryudnev: A Little Bird Has Been Singing a Song for Me. / ルドニェフ:ことりがうたってくれたうた

主題はどこか哀愁を帯びた歌で、どこか悲しい知らせのような雰囲気も漂う。それが右手で奏でられると、左手に受け継がれていく。主題には対旋律が寄り添い、素朴ながらもしっかりと対位法で書かれている。

[4] Béla Bartók: Children at Play / バルトーク:遊んでいる子供たち

ハンガリーの作曲家、バルトーク・ベーラは自身もすぐれたピアニストであり、《マイクロコスモス》や、この曲が収録されている《子供のために》など、体系的なピアノ教則本も書いている。《子供のために》はロベルト・シューマンの《子供のためのアルバム》に影響を受けてかかれたもので、芸術的な子供のための作品を作ろうというバルトークの強い想いが込められている。バルトークの作品は言語との関わりが深く、強弱はもちろん、スラーやアクセントなど細かな指示を的確に捉えて演奏する必要がある。第 1 巻の第 1 曲である《遊んでいる子供たち》は、それぞれが好きにことに熱中する子供たちの喜びと驚きを描き出すように、各指の独立が求められ、不協和な響きも随所に置かれている。

[5] Jane Smisor Bastien: Dublin Irish Jig / バスティン:ダブリンのジグ

ジェーン・スマイサー・バスティンはと夫ジェームスと共に「バスティン・メソッド」を開発した音楽教育家。

「音楽が人生の友となるように…」との願いから生まれたメソードは演奏技術と共に様々なスタイルの音楽を学べるもので、世界 10 数か国語に翻訳され、重要なメソードとして利用されている。《ダブリンのジグ》はバステインオリジナルの作品集である『バステイン先生のお気に入り レベル4』所収。イギリスやアイルランドの民俗的な踊りの形式の一つ。舞曲のステップを刻む左手にのって、ヴァイオリンをかき鳴らすような右手の旋律が奏されていく。

[6] Chihiro Todoroki: Autumn Waltz / 轟千尋:秋のワルツ

美しい旋律とあたたかいハーモニーによって多くの人の心をつかむ作曲家である轟千尋。特にピアノ曲でその手腕が発揮されており、子供向けの作品のように音数の少ないものでも、多彩な世界観を魅せる。ピアノをはじめたばかりの子供にも弾くことの楽しさや喜びを感じられることを目的に書かれた『きらきらピアノ 子どものピアノ名曲集 2』に収められた〈秋のワルツ〉は、秋の感傷的な雰囲気が右手と左手の対話によって紡がれている。

[7] Miho Abe: Cross a Log Bridge / 安倍美穂:いっぽんばしわたろ

安倍美穂はミュージカルや他分野とのコラボレーション作品など多岐にわたる創作を行い、ピアニスト、ピアノ指導者としても活躍。ピアノ曲にもその多彩な創作活動が反映されており、イメージに溢れた旋律美に富んだ楽曲を書いている。《いっぽんばしわたろ》は、3 部形式の小曲で、一つの旋律を右手と左手で共有して演奏する。橋を慎重にわたるように指の繊細なコントロールが求められる作品だ。

[8] Domenico Zipoli: Preludio in Mi minore / ツィポーリ:プレリュードホ短調

ドメニコ・ツィポーリはイタリア後期バロック音楽の作曲家・オルガニストであり宣教師。南米各地を訪問し、当時ヨーロッパの音楽の中でも特に洗練されていたイタリアの音楽のスタイル、そして教会音楽を広めた。《プレリュードホ短調》は教会で歌われるコラルを思わせる精緻な作品で、各声部の独立と調和によって清らかな響きを作り出されていく。

[9] Ernst Kullak: Hexenreigen, Op.4-2 / クーラック:魔女たちのおどり Op.4-2

エルンスト・クーラックはロマン派時代に活躍した作曲家であり、すぐれたヴァイオリニストでもあった。その卓越した演奏について、19 世紀を代表するヴァイオリニストであるヨーゼフ・ヨアヒムが「私が聴いたなかでの最高のヴァイオリン奏者」と評するほど。《魔女たちのおどり》はヴァイオリニストであるクーラックならではの楽曲で、五度音程の頻発や全体に使用されたスタッカートがヴァイオリンの独奏曲や弦楽アンサンブル作品を思わせ、不気味な雰囲気を作り出すことにも成功している。

[10] Lazare Lévy: Tambourin, Op.30-6 / レヴィ:タンブラン Op.30-6

ラザール・レヴィはフランスのピアニストであり音楽教師。『ピアノ奏法の奥義』を著すなど優れた教育者であり、クララ・ハスキルやフランス・クリダなど多くの世界的ピアニストを育てている。「タンブラン」はフランスのプロバンス地方に伝わる、胴の長い太鼓のこと。またこの楽器で「ガルーベ」という小笛を伴奏する、2 拍子の舞曲も意味する。ホ短調を主調としつつも導音がなく、旋法の響きを中心に構成された軽やかな舞曲である。

[11] Béla Bartók: Jest / バルトーク:冗談

バルトーク・ベーラが、芸術的な子供のための作品を作ろうという強い思いをもって書いた曲集《子供のために》第 2 巻所収。和音の連続で開始し、少しずつ伴奏音型が変化しながら、おどけた旋律が奏される。バルトークの音楽はハンガリー語と密接な関係があり、言葉のアクセント（最初や最後の音にアクセントが付くことが多い）を意識することが重要である。

[12] Yoshinao Nakada: The Song of Twilight / 中田喜直:夕方のうた

中田喜直は童謡や歌曲など、優れた声楽のための作品を多く残したが、ピアノ独奏曲やピアノ連弾曲、2台ピアノのための作品など、多くのピアノのための作品も残している。自身の手が小さかったこともあり、厚い和音の響きを使わずとも美しく効果的に楽器を鳴らす作品を書いている。《夕方のうた》は夕暮れ時の空の変化を描き出しているかのようなニュアンスに富んだハーモニーの上で素朴であたたかい旋律が奏される。

[13] Yuki Takahashi: Magical Stroll / 高橋由紀:ふしぎなさんぼみち

高橋由紀はピアニスト・作曲家。クラシックはもちろん、ジャズにポピュラー、ヒーリングなど多岐にわたるジャンルを手掛けるが、特にピアノ曲の作曲を得意とする。“ふしぎ”さを表すようなヘミオラによる序奏で開始し、軽やかなパッセージが鍵盤の様々な音域で奏でられる。様々な発見に心躍らせながらさんぼを楽しむ子供の様子が浮かんでくるようだ。

[14] Felix Mendelssohn Bartholdy: Consolation, Op.30-3 / メンデルスゾーン:なぐさめ Op.30-3

メンデルスゾーンの生涯のほとんどの期間にわたって書かれた《無言歌集》の第 2 巻所収。「無言歌」は、ドイツの作曲家、フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディが創始した楽曲ジャンルである。原語では「Lieder ohne Worte」、すなわち「言葉のない歌」を意味する。歌曲作曲家としてもすぐれた作品を残したメンデルスゾーンならではの甘美な旋律、色とりどりの和声に彩られている。〈なぐさめ〉は分散和音の軽やかな序奏に導かれてコラールふうの主部が奏でられる。なお、この曲は編曲されて讃美歌の第 30 番《あさかぜしずかにふきて》としても歌われている。

[15] Moritz Moszkowski: Petite Etude in b minor, Op.91-8 / モシュコフスキ:小練習曲短調 Op.91-8

ポーランドの作曲家であるモーリツ・モシュコフスキは存命当時大変人気のあるピアニストとして活躍し、その優れた技術を活かしてショパンの練習曲の導入としても愛奏されている《15 の名人芸のための練習曲》(Op.72) など華麗なピアニズムと優雅な音楽性を両立させたピアノ曲を残している。《小練習曲》は前述の Op.72 よりも平易なものだが、指の訓練だけでなく、レガートとノン・レガートの使い分けなど表現のための様々な手法や他声部の美しい弾き分けを学ぶことを目的としている。この第 8 番も 3 声のポリフォニックな作品で、なめらかなレガートの表現が要求されている。

[16] Dmitri Shostakovich: The Acrobats / ショスタコーヴィチ:アクロバット

ドミートリイ・ショスタコーヴィチは交響曲作曲家としてその地位を確立し、弦楽四重奏曲でも高い評価を

得ているが、優れたピアニストでもあり、ショパン国際ピアノコンクールの第 1 回に出場していたほどの実力を有していた。彼のピアノ曲は先鋭的な響きの作品も多いが、ポピュラー作品やジャズも好んだショスタコーヴィチらしく、軽妙でコミカルなものも多い。《アクロバット》はまさにそうしたものの一つで、スタッカートを多用した無窮動ふうの作品。アクセントの表現が曲のコミカルさを見事に演出している。

[17] J. Mulder: Soir au village / ミュルデル:村の夕暮れ

短調だが、悲しみというよりはだんだんと夜へと移り変わっていく美しい空の色を表現した色彩である。小さな村で静かに踊られる軽快な舞曲を思わせる。徐々に装飾が増え、盛り上がりを見せるが、最後は消えゆくように終わる。

[18] Bin Kaneda: Autumn Serenade / 兼田敏:秋のセレナーデ

兼田敏は作曲家でありコルネット奏者。管楽器奏者らしく息の長い旋律が特徴的な作品で、常に滑らかなレガート奏法が求められる。三度や六度、半音階やトリルなど様々な音型で旋律が彩られていく、時折ジャズの香りも感じられる繊細な楽曲である。

[19] Tomohiro Nakamachi: For a Short Walk / 中町友洋:ちょっとそこまで

2019 年度のピティナ新曲公募優秀作品。音階を主体とした作品ながら、様々な和声変化を伴うことで色彩豊かな響きが聴こえてくる。また左手の合いの手も多彩で、とりわけ中間部ではシンコペーションのリズムによって曲想を大きく変化させている。

[20] Jean-Philippe Rameau: La Villageoise / ラモー:村娘

ジャン＝フィリップ・ラモーはフランスのバロック時代を代表する作曲家であり理論家であった。〈村娘〉は《クラヴサン曲集》の第 2 組曲の第 8 曲。「ロンドー」という、リフレイン形式(各節最後の部分を繰り返す)の舞曲で書かれている。左手はステップを刻むだけでなく、内声も奏でることが求められ、ポリフォニーの要素も含んだ楽曲である。

[21] Isaac Albéniz: Capricho catalán, Op.165-5 / アルベニス:カタルーニャ奇想曲 Op.165-5

近代のスペイン音楽を確立した作曲家であり、傑出したヴィルトゥオーゾ・ピアニストであった。“天才”とも評される彼の超絶技巧は《イベリア》といったピアノ曲集で大いに発揮されている。〈カタルーニャ奇想曲〉は「6つのアルバムブラット」という副題をもつピアノ曲集《スペイン》の第 5 曲。左手のシンコペーションのリズムが特徴的で、穏やかな曲想の中に独特の“ゆらぎ”と空気感を与えている。その上で奏でられる旋律は非常に優美なもので、多彩な転調を伴って彩り豊かに展開していく。

[22] Jean Sibelius: Aquileja, Op.85-4 / シベリウス:金魚草 Op.85-4

フィンランドの作曲家、ジャン・シベリウスの《5 つの小品「花の組曲」》(Op.85)の第 4 曲。第一次世界大戦中の 1916 年に書かれ、この頃シベリウスは金銭面、精神面ともに非常に苦しい生活を送っていた。しかし全曲とも当時のシベリウスの状況とは対照的に、やさしく穏やかな雰囲気満ちている。〈金魚草〉旋律性豊かな部分と、きらびやかな分散和音に彩られた部分とが交代しながら奏される。

[23] Gin Ito: ZASHIKI WARASHI / 伊藤吟:ざしきわらし

2019年度のピティナ新曲公募優秀作品。「ざしきわらし(座敷童)」は東北地方に伝わる妖怪であり、いたずら好きで、その家には幸福が訪れるという言い伝えがある。この曲はそんなざしきわらしの“いたずら好き”の部分が描かれた作品で、急速な音型で鍵盤上を駆け巡る。弾き手と聴き手を翻弄するかのようで、ラヴェルの《夜のカスパール》の第3曲〈スカルボ〉を思わせる性格である。